

それ以来、酒屋で枡に酒を注ぎ、立って呑むことを、「角を打つ！」と言われ始めたとか…？

「角」は、どう疑っても「枡」しかあり得ない。

一部、“カウンターで”などという説があるが噴飯もの、その時代の酒屋にカウンターなどあるはずがない。

◎どの解釈も、「角」は「枡」の意味だろうまでで終始しており道半ば。

「打つ！」には、誰一人踏み込んでいない。

この現状を『角打ちの定義』を会是とする神戸角打ち学会として、看過するわけにはゆかない。

★神戸角打ち学会の「語源解釈」として後世に残し語り継ぎたい。

角打ちの「打つ」に関連する考察

これまでの三十有余年に亘る立ち呑みの経験、経緯から、やっと、以下の結論に至る。先ず、「呑む」の意から抽出される「ごく、ごく、ごく」と「打つ」に、何らかの関連性があるという仮説で取り組みを進めた。

それでは、気になる「3つの案件」から解き起こしその「真意」をあきらかにしよう。

① 遍路を打つ

昔日、遍路の関連で「逆打ち」という語句を知る。すなわち「逆回り」正しい回り方は「順打ち」。

遍路をなぜ、「打つ」というのかを調べると核心はこうだ。

◎いまは「紙の札」を参った寺に納めるが、古くは「木の札」を参った寺に槌や石などで「打ちつけて」帰ったことより派生し「遍路を打つ」となったとの記述が。

「コン、コン、コン」と打ちつける。

そう、角打ちも「ごく、ごく、ごく」で呑み終える音の響きから、枡で酒を呑むありようを「打つ」と表現したのでろう。

ここで「打つ」とは

酒を気合いで「塊」のように喉に放り込む意と重なる

② 合槌を打つ

刀鍛冶が、たたらで造った玉鋼を槌で打つ時、弟子が両脇から「阿吽の呼吸」を介し鉄槌で叩く。

これも「コン、コン、コン」・・・相槌を打つの語源は、これから派生したとのこと。

「打つ」という言葉には、日本文化の本質が潜む、「言霊」が宿る。

酒呑みの先達は「枡」を隠語としての「角」に置き換え、更に意味ありげな「打つ」と結びつけ、「角打ち」という見事な言葉を残してくれた。

当時の「酒屋主人」と「客」の枡を通じての阿吽の呼吸まで観えるようである。

ここでも「打つ」とは

酒を気合いで「塊」のように喉に放り込む意と重なる

※写真酒さんの言う仇討説をこの視点で解釈すれば講談師は「仇を打つ」に「角を打つ」を音韻的、意味的にもかけたわけで、講談台本を作った時代の前から「角打ち」の言葉はあったと思われる。

もし……先達が「角飲み」としていたら……

仇討の中山安兵衛は枡に入った酒をさも旨そうにちびちび味わう。

飲み始めて数刻、「肴じゃあ、旨い肴を持って来い」「もっと上等な酒はないのか」など、まるで舐めるように延々と飲み続け、終に日は落ち、その日の仇討は終に果たせなかった…こういう顛末になったろう。

■すなわち、角打ちの「打つ」とは

酒屋の店頭で、計り売りの酒をあわたくしと恰も、塊りの如くに「ごく、ごく、ごく」とまるで呑み逃げでもするか如く、三口で呑む早技を「コン、コン、コン」のリズムと重ね表現した、先人の文学的叡智ではなかろうかと思う。

※擬音からの派生という妙味に心くすぐられる。

③餛飩を打つ

手捏ねや、足踏みでこさえる餛飩、さらには蕎麦を何故打つというのか疑問であった。世の解釈では

- ・捏ねた生地を板に打ちつけたから。
- ・料理用語で「切る」を打つと表現する慣習から。
- ・中国語の(打電話—電話する)打は、なにになにする意で餛飩をこさえるという意味。など解釈されているが、ここに核心的解釈を発見。

昔の中国で、麵を作ることを「打麵」と呼んだそうな、いまの中国語の「拉麵」は、「拉」が引っ張り伸ばす意味であるからして、ひっぱり伸ばした麵という意味になる。日本の「素麵」は中国では「拉麵」の範疇なのだろう。

やよ福フアンクラブの汪先生も「拉麵は縁起がいい」とおっしゃる、寿命が延びる縁起から。

この「打麵」、まさに、木槌で麵の生地を、「コン、コン、コン」と叩きのぼしていたということ。

これと前の、「遍路を打つ」「相槌を打つ」の3つを通底している**符号**は、「コン、コン、コン」。

更にここでも「打つ」とは

酒を気合いで「塊」のように喉に放り込む意と重なる

◎最後に「余談なことと断り置く」が……

①遍路になぞらえ「打つ」とした背景に

- ・角打ちは神聖なこととして意味付けようとして、枡を四国に見立て、酒遍路したいという願望を、神仏信仰にかこつけたのではないだろうか？
ここに日本文化の神髄、軽さと俳味が感じられる。

・当時酒は貴重品。飲み足らず、八十八枩呑みたいなあとの「はしご酒」、願望も込められていたのかもしれない。いつの世の酒徒も同じ。

「角打ち」の打つは「遍路を打つ」に、なぞらえて生まれたと見る方が自然だ。

②うどんも「打つ」というが、うどんもルーツは、弘法太師が唐から伝えたとの説も。同じ「打つ」の語源で勘ぐれば、「角打ち」の先達はひょっとして、「遍路を打つ」「饅頭を打つ」の並びとして「角を打つ」に思い至ったのか。

まさに時代の寵児、最先端の「鉾山技師」でもあった、弘法大師にあやかっただけは…！

などと勘繰ったりもしたくなる。

③相槌を打つ、鍛冶技術の重要な炭、火力の強いたたらに必要な「白炭」も、弘法大師が唐から持ち帰った「製炭技術」。

まさに余談だが、「①遍路を打つ」「②相槌を打つ」「③饅頭を打つ」この「3つの案件」の背後には弘法大師が……！？

「打つ」は「呑む」と同義だと結論付けたが

「角打ち」は日本の酒文化に裏打ちされた麗しい言葉

即物的な「立ち呑み」よりこころくすぐられる

結論

「角」は「枩」の隠語

「打つ」は、「ごく、ごく、ごく」の「コン、コン、コン」の音韻置き換え

「角打ち」は言霊の国「日本」の俳味あふれる粋な先達の「造語」である。

(神戸角打ち学会定義より)

追記

上記の「角」と「打つ」の語源・定説は、神戸角打ち学会としての定義です。

昨今、角打ちブームにより各地域で、「角打ちの語源」の議論がなされているようですが、語源・定説の各諸説があってもいいのではと思います。

拝読された読者の皆様の持論やご意見をお待ち致しております。

【神戸角打ち学会「たちのみ」4分類】

名称	特徴
『立ち飲み』	飲食店がいすを取り除いた「引き算」の営業形態
『立ち呑み』	酒販店が「飲食店まがい行為」を追加した「足し算」の営業形態
『角打ち』	酒販店が客に店内で酒を飲まず祖形の営業形態
『たちのみ』	酒販店の店先で客が勝手に自販機などの酒を飲む行為 ＝立ってるのみ、すなわち酒を飲まない物も範疇に加わる＝ (命名者：慕撫学会員)

目玉ナビ vol.1

－東京スカイツリー観光とセットでぶらり酒の旅－

旅人‘ぶら目玉’こと松住隆夫

■ 今年の夏休みは東京でぶらり酒の旅はいかが

2012年(平成24年)5月22日に開業した東京の新しい観光スポット‘東京スカイツリー’は今や日本中の関心を集めているホットな場所だが、実は、その周辺には気軽に立ち寄ることができる飲み屋の町が点在していることをご存知だろうか。

東京スカイツリーの最寄り駅の一つ、押上駅は、東京メトロ半蔵門線、東武鉄道伊勢崎線、京成電鉄押上線、都営地下鉄浅草線がクロスするターミナル駅。今回はその押上駅から京成押上線で四つ目の京成立石駅を中心とした‘ぶらり酒の旅’を目玉ナビしよう。

■ 大衆酒場の聖地‘立石’でまずはもつ焼きから

京成立石駅は、各駅停車のみが発着する小さな駅である。この駅の改札を中心にして半径150メートル圏内に、ほとんどの飲み屋がある。

こういう旅は連れがいたほうが盛り上がるし経済的でもあるので、知り合いを一人誘って京成立石駅の改札で午後3時半に待ち合わせ。そう、この時間から飲めるのである。さすが下町大衆酒場の聖地と言われるだけある。①もつ焼き→②串カツ→③鳥のから揚げ→④立食い江戸前ずしという流れを組み、いざ出陣だ！

町の雰囲気は昭和40年代半ば、今から40年ほど前という感じだと思ってもらえればよい。駅の東側には道幅4メートル、長さ150メートルほどの「仲見世通り」なるアーケード街がある。まず目指したのは、そのアーケード街に入ってすぐのところにあるもつ焼き屋「宇ち多」だ。が、ここは人気店で店はとても狭く、中は満席。平日は午後2時からやっていて、この時間ですでに順番待ちの列が出来ている始末。「早く飲みたいなあ、並ぶのは面倒なのでまた来よう」ということで、ここはすぐさまパス。

そこで、最初に入った店は、今回の店で駅から一番遠い(といっても駅から徒歩5分に着いてしまう距離)もつ焼き屋「いせや」。ここは、吉祥寺の井の頭公園そばにある有名なもつ焼き屋「いせや」の分店なのだ。でも、この存在を知っている人はあまりいないんじゃないだろうか。その証拠に、店には2人連れの客が一組のみ。すいているし、店の前には、レモンサワー最初一杯が無料になるクーポンが置いてあるし、我々にはラッキーだ。



タン、はつ、レバー、しろ、鳥のつくね、ししとうなどの串ものは1本どれでも80円。レモンサワーを二杯飲んで40分ほど滞在し二人で1,680円也。いいね、この安さ。

■ 続いて、間に刺身の盛り合わせを挟み、串カツ屋2軒のはしご

お次、2軒目は串カツ屋「100円ショップ」。一本100円だからこの店名だとか。

店は京成押上線の線路沿いにあるので、場所が分かりやすい。客はまだ一人しかいないが、でも、これが普通だよな、まだ午後4時20分だもの。

この店は立食いで、L字型のカウンターに40人も並べば超満員という広さだ。推測だが、厨房の造りから以前はラーメン屋だったような気がする。

厨房内の壁に目をやると‘店の掟’なる板があった。そこには、「串カツを置く皿を動かすな」とか「カウンターの上の段に飲み物を置くな」とかが書いてある。背中側の壁には「串カツ食べながらウンチクを語ることなかれ」とか「質問：おすすめメニューはなんですか→答え：うちのメニューはすべてがおすすめです」とかが書かれた張り紙もあった。



「店主の意に添わない客が多いのかなー？」なんて思いながら、生ビールと豚、鳥ささみ、しいたけ、ピーマン、豚の紅しょうがロール、大根を注文。「大根の串カツは大阪では食べたことないなあ、豚の紅しょうがロールはそれぞれの味がマッチして面白い味だなあ」なんて思いながら食べた(ウンチクは語っていない)。が、「客が少ないので揚げたてがすぐ出てくるからホクホクなんだけど、食感にちょっとサクサク感が足りないかなあ」と思っていたら、連れが「隣の串カツ屋と食べ比べよう」と言い出したので、25分ちょっとで店を出た。ここの勘定は二人で2,100円也。これも安いね。

ちなみに、このお店は2008年(平成20年)5月に発売された雑誌『TOKIO 古典酒場』の42～44ページで紹介されている。また、この雑誌の90ページには、はらぐち酒店の女将さんがど〜んと載っているのであらためてご確認を。

さて店を出て、30メートルほど離れたもう一軒の串カツ屋「毘利軒」の暖簾をくぐると、「ゴメンネー、まだ開店前なのよー」と奥さんの声。時計を見ると午後4時50分、開店10分前。「それならほかに一軒寄って出直しましょう」ということで、踏切を渡って線路の反対側を散策することにしたのだが、そこはとてもディープな感じの飲み屋街だった。

毛筆体で‘呑んべ横丁’と書かれた小さなゲートをくぐると、その右手は飲み屋の密集地帯になっていた。幅1.5メートル、長さ30メートルほどの小路が二本平行して線路沿いの道から垂直に伸びている。その小路の両側に小さなバー、飲み屋が並んでいる。小路には屋根が架かっていて薄暗く、それがまたいい味を出している。ただ、時間が午後5時で、この時間では開いてる店がまだ一軒もなかったことがちょっと残念であった。

そんな横丁を一回りして先に歩みを進めると、すし屋「江戸安」があった。連れが、「ここ安いから入ろうよ」と言い出す。店を見ると、マグロ、イカ、タコ、サーモンなどなど、

握り一貫 50 円からと書いた看板がある。

「あ、でも、これたぶん 1 個が一貫という意味で書いてるね。ほんとは 2 個で一貫なんだよ、すしは」と言うと、連れが「だめでしょ、うんちくは」と返してきた。

そんな会話をしながら、足は迷うことなく 3 軒目となった「江戸安」に向かった。「にぎりとか安い！」ってことで入ったが、このタイミングで炭水化物を食べてしまうと次が厳しいという理由から、結局、刺身の盛り合わせ&ビールにし、こちらは二人で 3,400 円也。と、刺身のネタがなかなか良かったせいもあり、串カツ食べ比べの繋ぎで入ったすし屋が、今回のぶらり酒でいちばん高くついたのはご愛嬌。次回は、にぎりで来よう。



そして 4 軒目、串カツ屋「毘利軒」に出戻り、食べ比べ。こちらのは全般的に食感がサクサクフワフワで美味しかった。2 軒目の「100 円ショップ」は大根の串カツにオリジナリティがあり食感も良かったが、豚の紅しょうがロールは「毘利軒」に軍配って感じた。

また、夫婦でやっているようで、奥さんは客あたりがよく明るいが、串カツを揚げる旦那は寡黙だ。だが、この旦那、客の食べ具合を観察し、一本食べ終わるとよい頃合で次の一本を揚げて出してくるきめ細かい配慮をしていた。そこに店は小さく 10 人ほどで満員になるくらいの広さだからこそ、旦那のこだわりを感じた。

ソース二度付け禁止のキャベツの盛りもよかった。こちらは二人で 1,540 円也。



■ 𠂇に向けて力を振り絞る…も

予定では、このあと‘鳥のから揚げ’→‘立食い江戸前すし’だったのだが、いやーたくさん食べた。特に串カツってけっこうお腹がいっぱいになる（串カツだけで 2 軒行けば当然だが）。

「あのでかい鳥のから揚げは無理だな…」

連れも同じ思いだったらしく、少しは軽いものということで、炭水化物のすしで締める前に、5 軒目の餃子の店「蘭州」に入った。店を覗いたらギリギリ席が二つ空いていたこともあり、丁度いいとは思ったものの…

注文したのはビールに焼き餃子と水餃子。水餃子がもちもちなのに溶ける感じでめっちゃ

くちや美味しかった。がー、あー限界。

「これじゃあ、もー、すしは食えんわ、このやろ」と、ここで降参。二人で1,200円也。



こんな流れで満腹状態になって店を出たら、外はまだ明るかった。夏至を過ぎたばかりの6月下旬、時計を見たら、まだ午後6時45分だった。

「ああ、なんと健全なるぶらり酒の旅」

ちなみに、お腹に余裕があったら行く予定だったのが、鳥のから揚げ「鳥房」。このから揚げは首から足までの半身から揚げなのだ(鳥房も雑誌『TOKIO 古典酒場』に掲載あり)。

そして、立食い江戸前ずし「栄寿司」。カウンターでの立食いにぎりずしは、東京ではよく見かける店のスタイルだが、九州では珍しいかも。

いずれも京成立石駅から徒歩1分。そのうちまた来よう。

このように京成立石駅周辺には、もつ焼き、串カツ、中華など酒のアテにピッタリなメニューが充実した飲み屋がコンパクトにたくさん集まっている。安いし、風情もある。

皆様、今年の夏は立石に出かけ、ついでに東京スカイツリー観光にお越しくださいませ。

[ぶらり酒の旅 実施日：2012年(平成24年)6月28日(木)]

ヒトタラシ

桜木 大祐

私が二十歳の頃、とある先輩と飲んでいて聞いた話をこの前ふと思い出した。

「桜木よお、舞台屋ってのは一流のヒトタラシじゃなきやいけねえんだよ」この一言は、先輩が経験したある出来事から導き出した答えらしい。

その日、一本のFAXが届いた。「〇月×日お世話になります、ほにやららライティングの☆●□▲と申します。本来ならば、そちらにお伺いして打ち合わせをさせていただくところですが、ツアー中の為お伺い出来ません。取り急ぎ仕込み図を送らせていただきま

すので、当日対応にて宜しくお願いいたします」。

直後に彼から「何卒宜しく」と電話があった。前日の行事が早く終わり、先輩は「仕込み図も有ることだし…」と荒仕込みをざっくりとした。

そして本番当日。通常ツアーの乗り込み業者は4～5人でのチームを組んでやって来るのだが、乗り込みの彼は、単身で小屋入りしてきた。

そして彼は開口一番「うわあ、ありがとうございます～。何かから何まですいません」と申し訳なさげな顔で感謝の弁を述べた。続けて「プランの変更が多少ありますので、ちょっと手直しさせていただきます」といい、手直しを始めた。先輩は乗り掛かった船という気持ちからか、手伝いを始めた。そして2時間後、一人で来たその乗り込みは、仕込み図とは全く違う仕込みを仕上げた。先輩を上手く使って…。

しかし、ヒトタラシじゃなきゃいけないのって舞台屋に限らないんですよ。どんな職業でも例えば学生でも、あるいはそこらのクソガキにも野良猫にだって…ね。

ことさらに短夜にして別れけり

瓦口 龍

小沢昭一的俳句搜しの旅にでてはや幾星霜。よほどその方面の感性（あえて感性と呼ぼう）を研ぎ澄まさないとお目にかかれぬ。

ことさらにの句は、藤木俱子氏の句ですが、突然、私の前にその身を投げ出して来た。が、それにしても別れの句ではあるが、何の変哲もない。ように見える。短夜の季語が怪しい。艶然とした風情がある。早速、新日本大歳時記カラー版をめくる。

[短夜]みじかよ、夜のつまる、明易し、夜の短さ、夜の明けやすさへの感慨が中心になっている季語…。なんだ面白くもなんともない、小沢昭一的には不健康な季語だ。…だが…なんだアーッ！！だがあったのヨ～～～。だが古典和歌では、人を待ちこがれる、また会った後の後朝（きぬぎぬ）の思いにからめて使われている。これダーッ。

小沢昭一的感性の至福…「明けぬれどまだきぬぎぬになりやらで人の袖をもぬらしつるかな」（新古今（恋三）1184）歳時記は続く。俳句では古典和歌のような恋とのかかわりは少なく、時候への感慨が中心になって使われている…面白くない、俳句は嫌いだ。だがこの解説では浅すぎる、もっと深いところまで到達しないと満足しない。

更に検討続行…。これが匂いぬる。怪しい。すばやく、全訳続解古語辞典をひもとく。きぬ・ぎぬ（衣衣）（後朝）——二人の衣服を重ね合せて共に寝た男女が翌朝、それぞれの衣服を着て別れること。また、共寝した翌朝の別れ、また、その朝——。

ありましたです、素晴らしいお言葉です。小沢昭一的大満足の心なのだ。

貴族の結婚は男が女のもとに通う形態でした。朝の別れは切なく、悲しいものであったことは大変よく理解できます。

今回はこれにて失礼いたします。

雨ですね～～いかがお過ごしですか？

博多海鮮居酒屋はじめの一步：女将

こんにちは～！
お元気ですか？

私、今年の4月に3人目の孫が誕生しました！
50歳で孫3人はうれしいですね～～。
全員女の子でかわいいかわいい！！(^_^)

一番上の子は年長さん。
来年は1年生。
ランドセルを買ってやるのが楽しみです。

彼女は「だぢづでど」が「らりるれろ」になります。
「おともだち」が「おともらち」
「こども」が「ころも」
「いやだ」が「いやら」
「そうだけど～～」が「そうらけろ～～」などなど

も～～～<<o(>_<)o>>なんてかわいいの。

息子が小さい時、数字の「11」を自分の名前と同じ「りゅういち」だと思っていて、お風呂で数を数える時必ず「11」のところで止まって「僕の名前と同じやね～～」というので「そうやね～～」と言いながら、いつ気がつくんやろ～～ふふふかわいい?と思っ
てましたね～～。

忘れもしないのは息子が小学校4、5年生のときだったか・・・
幼稚園児のいとこ（男の子）が遊びに来て「ち〇こ、ち〇こ」とふざけていた時
（全く幼稚園児は下ネタ好きだよな）、「こら！そんなこというんじゃない！」と兄貴ら
しく言ったので、おっと、昨日までは一緒にふざけていたのに・・・と感心していると
「いいか、お兄ちゃんは学校で習ったけん、教えてやる」と言う・・・
いったい何を教えるのかと期待していると、「ち〇こじゃなくてこれからはぺ〇スと言
え！ち〇この本当の名前はち〇こじゃないとぞ！！」(+_+)

.....
.....
.....

学校で習ったらしい・・・|||(-_;)|||||

しかし、いとこの男の子はおにいちゃんの言うことがあまり理解できなかったようで、次の日幼稚園で「ペ〇ス」を連呼するという大惨事には至らなかったようでした。

よかったね～～ははは

まったく子供がいると笑いが絶えないですよね！

しかし笑ってばかりいられないこともたくさんありました。

ケンカもたくさんしたしね。(^ 3 ^)

今はその息子もお父さんになりました。

孫たちの成長が楽しみで～～～す！！ちゃんちゃん！！

あ～～今回も下ネタになってしもた・・・|||(-_-;)|||||

下ネタ好きのみなさんへお贈りする心温まるストーリーでした！

ってことでいかなもんでしょ (*^_^*)

あんたも好きね～～～ふふふ。

我輩は「みじんこ」である

徳永 雅樹

本名以外に名前があるのは芸能人や夜のお姉さんが一般的でした。しかし、昨今のネット社会に於いてはハンドルネームと言われるネット用の名前を誰しも持つようになってきた。そこで知り合った者同士なら実際に顔を合わせてもハンドルネームで呼び合うのが一般的である。

さて我が住む町、大分市長浜の「御手洗酒店」にはハンドルネームならぬ角打ちネームがある。もちろん全員ではないがその人が持つ雰囲気や容姿、立ち振る舞いからその名が付けられる。

元西武ライオンズの投手で現在大リーグ「レッドソックス」の松坂投手その彼に似ているということで「マツザカ」と呼ばれる伊藤さん。なるほどよく似ている。本人もまんざらでもないようで、店内で挨拶する際は「マツザカです」と言っている。初めての客でも店内に彼がいたらすぐに気付くことでしょう。

「しょうちゃん」と呼ばれる藤田さんには二つの説がある。来店し始めた頃は本人の名前も素性も分からぬ存在。もちろん名前に「しょう」が付くわけではない。でも店内では

「しょうちゃん」なのだ。

ではなぜ？アニメ「鉄人28号」をご存知でしょうか？正直、私はまだ生まれていなかったのによく知らない。が、主人公の顔くらいは思い浮かぶ。

そのアニメの登場人物の中に「ショウタロウ君」と言う少年がいたそうです。その少年に彼が似ているから「しょうちゃん」と呼び始めたという説。私もその場にいたのでよく覚えている。もう一つの説は、彼の髪型がどこか古めかしく「昭和の髪型やなあ」と言われたことから「昭ちゃん」、すなわち「しょうちゃん」になった説。

真相はどうでもいいけど、二人はお店からも客からも愛されている客であること。マツザカさん同様に「しょうちゃん」も来店すれば分かりやすいキャラですのですのですぐにわかりますよ。

ちなみに私は「みじんこ」と呼ばれています。本名はあまり知られていませんが…。

ただし、これは角打ちネームではないのです。角打ちを始めるずっと以前からのネームです、詳しくは来店された方にこっそり教えてあげますよ。(笑)

対話

角打ちのピアニスト 谷口淑子

6月22日、早朝ドキドキしながら西日本新聞を広げる。



今年、第28期読者モニターに任命された。

毎週金曜日【モニター紙面評価】というコーナーに、10名のモニターがローテーションで紙面に提言。

私の番だった。北九州市で、今、最も動きのある「がれき受け入れ」を含む内容だった

ため、昨日の夕方まで、担当のA氏とやりとりをしていた。

最初に私がA氏に送った原稿の見出しは、「対話が聞こえてくるような紙面に」。しかし、昨日A氏から届いたもの見出しは、「がれき問題 疑問に答えて」だった。この方が、今関心の高い「がれき」にひかれて、たくさんの人に読んでもらえるんじゃないかと。

そうですね～と言いながらも、私は、「紙面への提言としては、がれきへのこと以上に、最後に書いた対話が聞こえてくるような安心感のある紙面をのところに想いがあるんです」と、自分の想いだけは伝え、あとは、見出しを決めるのは編集部の権限だということでおまかせした。

今朝の見出しは「対話が聞こえる紙面に」だった。ああ私の想いを汲んでくださったのだなあとうれしく思い、またこの新聞社へますます好意をもった。

しみじみと自分の顔写真の載った新聞を眺めながら、これまた私ったらなんでまた新聞へ提言をするような私になったんだろうと思う。私を推薦してくださったY記者との出逢いや私という人間のこれまでを思い返したりして。

「まちに」改め「まちと」生きる音楽家としての私の在り方、生き方を、また考えてみたいと思う。

ネット社会の現代においては、顔を突き合わせての「対話」が少ない。

そんな現代で、カクウチは貴重な「場」だと思う。狭い空間、お酒を真ん中に、誰と誰でもが他愛もなく時間をともに過ごす。

何をしゃべらなくても、そこには対話のような空気が流れている。

こころの樹

上田喜久雄

7月1日、小倉から黒崎へ抜ける長崎街道に沿って、二つの文化施設がオープンした。一つは黒崎の旧厚生年金病院跡地に建てられた文化交流施設（図書館・ホール）で、もう一つは常盤橋から八幡に抜ける街道に程近い下到津の一角に開店したスポーツパブ「こころの樹」である。

ヘアサロンと隣接したそのパブは、白を基調とした清潔な感じのお店で、店内も明るく居心地がいい。何よりも玄人肌ママの手料理は最高である。店の前はバス通りで、帰る分にも気が楽である。

プレオープンの30日にお邪魔し、赤霧と黒霧をキープしておいた。小倉に立ち寄られた際は是非「こころの樹」でママの手料理をアテに赤と黒、好きな方を召し上がっていただきたいものである。

友人に誘われ俳句を始めて10カ月になった。今では、全くの素人がよくもまあ怖いもの知らずで始めたものだ——。だが今では、はまって抜けきらなくなってしまった。

句会の方々に感謝している、俳句がなかったら毎日が日曜日の生活では酒と読書三昧の日々となっていたかもしれない。毎月、第一、第三金曜日と第二、第四土曜日が句会となっており、都度、5句提出している。まだまだ、皆さんの脚元にも及びませんが楽しい時間を過ごしている。

この間、時差1時間の中国にはまり二度、旅をした。偉そうにも「中国行」と題して30句作ってみた。まあ、素人の遊びと一笑ください。酒の句が一句とは情けないがこれからは意識して酒を取り込もうと思う。

10カ月といえば、赤ちゃんとして世の中に生まれくる期間と同じである。さあ、これから句会の方々の授乳で育つのだろうか？

- ・ 長城の男と女の坂に秋
- ・ 長城の磴の凹みや秋模様
- ・ 天高し長城往けば届くなり
- ・ 秋うららりモコン操作のパンダかな
- ・ 十三陵に生きる皇帝秋静か
- ・ 頤和園の栄華に釣瓶落としかな
- ・ 天壇のどっしり姿馬肥ゆる
- ・ 秋深し焼土の下に兵馬俑
- ・ 色葉散る同じものなき兵馬俑
- ・ 兵馬俑毅然と並び秋澄みぬ
- ・ 大雁塔ざくろの如く煉瓦積む
- ・ 玄奘の七層の夢柿熟るる
- ・ 玄奘と悟空八戒夜長かな
- ・ 二時間も遅れし空の長閑なり
- ・ 一時間時計をもどす日永かな
- ・ 桂林のをかしき山の山笑ふ
- ・ 蘆笛岩地下宮殿に春の虹
- ・ 象に似た山が動きし亀鳴いて
- ・ 桂花酒の匂ふ並木や鳥交る
- ・ 日塔月塔今日は四月の十九日
- ・ 豊彩山五百の磴の春暑し
- ・ 春の雨漓江の渦に強さあり
- ・ 合羽着て下る漓江や春闌ける
- ・ あたたかな雨を見方に漓江撮る
- ・ 漓江往く紙幣の絵柄霞をり

- ・「大熊猫小秘密」の看板のあり竹の秋
- ・龍脊は天の水張り夏近し
- ・空写す春の棚田は華やげり
- ・莖立てり竹筒飯を鉋で割る
- ・一度しか切らぬ黒髪風光る

されどテクテク

吉本 光一

函館市に住むえっちゃんからB5判の分厚い封筒が届いたのは、風の冷たい3月初めだった。札幌市在住のユキちゃんと二人、オヨネーズと名乗るコンビを組み、生まれ育った北海道の大地を隅から隅まで、自分の足で踏み締めて歩き尽くそうと一念発起して函館市をスタートした。二人とも還暦を過ぎた3年前の5月10日だった。

オヨネーズのてくてく北海道一周

北は稚内の宗谷岬、東は知床半島、南は襟裳岬、西は渡島半島の恵山岬を漏れなく周る全コース2500kmを10回ほどに分割して歩きつないできた。あとは洞爺湖のある洞爺町からゴールの函館市まで250kmを残すだけだ。記念すべき最後の区間を2人と一緒に歩きませんか、という誘いの手紙に、行程表とザックにはり付けるユキちゃん手製のゼッケンが添えられていた。ゼッケンは、白い厚手の木綿地に北海道の地図と「てくてく北海道一周」のタイトル、そしてえっちゃん、ユキちゃんの名前の下に、応援隊 吉本光一の名前も真っ赤な刺しゅうで縫い込み、洗たくにも耐えられるよう裏地をうってある。

今年古希を迎えた30余年来の旧友エンちゃんから、この1年、同じ誘いを何度も受けていた。エンちゃんは、5年前、韓国のソウル―釜山間550kmを一緒に歩いた朝鮮通信使21世紀友情ウォークの事務局長で、来春の第4回からはその隊長を引き継ぐ。ユキちゃんはそのときのメンバーの一人で、その後もエンちゃんとともに1年おきに同じコースを歩いてきた。えっちゃんは私とは東京の山手線を一周しただけだが、ユキちゃんと同じく日本ウォーキング協会では知らない人がいないベテラン・ウォーカーの一人だ。何年か前、下関市で開かれた朝鮮通信使縁地連絡協議会のあと、エンちゃんやユキちゃんら全国のウォーカー仲間と7人で若松の狭いわがマンションになだれ込んで雑魚寝した縁がある。

いずれも、1日40kmを40日間歩きつづけてもビクともしない体力の持ち主なのにひきかえ、当方は20kmコースを年に2、3度歩く程度の、いつになっても初心者である。〇〇さんがウォーキング大会で転んで骨折し救急車で病院に運ばれた、という事例が毎年、耳に入ってくる。たかがウォークとあなどっていると、周囲の人に迷惑がかかる。長らく返事をためらってきたが、送られてきたゼッケンを手にしたら、おじ気づいている場合か、という気になった。

人の世の清き国

ウォーキングの標準的なスピードは1時間に5km。私の歩幅は約75cmだから毎分110歩ほどのペースだ。高校時代、東京の神田・神保町の本屋街と秋葉原の電気街をわずかな時間をひねり出して往復したころは、毎分120-130歩のペースが苦にならなかったが、喜寿のいまはそうはいかない。小用などで列から離れると、死にもの狂いでないと追いつけない。同行者との間で歩きながら話はずむと、ピッチがダウンする。そうならないように、カメラものぞかず、わき目も振らずにただ黙々と、一步一步に専念する。家の影のない、背高のイタドリが茂みが無限に続く山道を上っては下り、10余kmすぎて集落の屋根が見えてくると、人の世に舞い戻ってきたような安堵感を覚える。

歩くだけで精一杯となる大きな理由は、危険の大きさが予想をはるかに超えることだ。危険の中身は人によって異なるが、初心者の私の場合は、自動車、トンネル、眠気が3大危険だ。

国道のほとんどは歩道の通行は事実上想定外だといってよく、歩行者の安全を考慮に入れた歩道は設けられていない。直線区間が何kmも続くので、トレーラー、トラック、バスなどの大型車が時速100km以上で突っ走り、片道1車線の区間でも平気で対向車線にはみ出して追い越しをする。歩道で受ける風圧は半端なものでなく、その都度、帽子が吹き飛ばされる。車道との間に白い境界ラインを引いただけだから、その威圧感とはとてもなく大きい。もっとも、今回の期間中、ほかの歩行者に出くわしたことは一度もないから、段差のある歩道などを注文する気にもなれないが。

トンネル内には、15-20cmほど段差をつけた歩道が設けられているが、その幅は50cmほどと至って狭い。照明はうす暗く、前方からのヘッドライトに幻惑されて、左足が何度も歩道の路肩から滑り落ちて転げそうになった。しかもトンネル長が長く、その数も多い。

だが、最大の危険は、自分の身内から生じる眠気である。白内障の手術後、左右の目の焦点のズレが顕在化したために、目の疲れが激しく、絶えず激しい眠気に襲われる。居眠り歩行が常態化して、背後から見ていると左右に大きく蛇行しながら歩いている、といわれる。

3大危険のどれも、5年前の韓国では感じなかったものであり、文字通り想定外だった。このため、夕方宿に着くと、仰向けに転がったまましばし動くこともできなくなる。

オヨネーズの二人は違う。小柄の彼女らは標準速度で毎分120-130歩のピッチだと思われるが、水の上を歩くような軽い足取りは見とれるほどだ。先頭に立ってもしんがりにおいても、二人並んで話が弾んでいる。足の動きが鈍ることは決してない。昼には休息場の設営、食事のゴミの始末をし、通過する町村では遠回りになっても役場に顔を出して首長さんに挨拶し、寄せ書きに激励の言葉を書いてもらう。

これに、私ら応援隊に対する気配りが加わる。宿に着く前には缶ビールを買い走り、ご亭主が運転する伴走車に積み込む。宿に入ると、その日の洗たく物を集めて来て、全員の分を3回に分けて洗たく機と乾燥機にかけ、就寝前に各部屋へ配って回る。洞爺町から参加した応援隊は私も含め5人、それに支援隊（伴走車）の2人。夕食会場にカラオケ・セットがあるときは、曲のオーダーを聞き操作するホステス役がそれに加わる。夕食後は、どこかの部屋で二次会が必ず催される。そのころ、乾いた洗たく物が部屋に届けられる。

この間に、翌日の昼食の手配や、次の宿の宿泊のコンファームなどもある。

てくてく北海道一周のウォークの主役と、応援隊をもてなし気を配るホステス役が同時に、しかも10日間、休むことなく続く。仕事や理屈ではありえないことが成り立ち、私たち参加者の一人ひとりがその場に参加していることを感謝し悦びを感じる事が、主催者の受け取る唯一の報酬である。これを企て、実行した道産子オヨネーズの肝っ玉とエネルギーに度肝を抜かれると同時に、明治の人が「人の世の清き国ぞとあこがれぬ」（北大寮歌「都ぞ弥生」第一節）と謳歌した青い鳥の世界がいまの世にも実在していることに気づいた。これは思ってもみなかった至上の悦びだった。

榎法華（とどほっけ）旧村の母校で

洞爺町を出発して7日目の6月11日、夕方到着したのは渡島半島の突端、恵山（えさん）のふもとに位置する小さな漁村だった。数年前まで榎法華（とどほっけ）村といったが、平成の大合併の際に函館市に組み込まれ、いまは字名が残るだけとなった。ここがユキちゃんの生まれ故郷だとは、訪れて初めて聞いた。彼女は11人きょうだいの下から2番目で、中学を卒業するまでこの地で育った。カレイやスルメイカ、コンブ漁で知られる、小さいが道南きっての漁業基地だ。

母校の中学校を訪問すると、同級生が10数人、玄関で出迎えた。宿には歓迎の気持ちをこめたビールのケースも届いていた。男性の1人が真先に口にしたのは、本人でなく、支援隊の二人へのねぎらいの言葉だった。

「お二人とも、3年間もよくサポートしてくれたねえ。費用だって二人分となればハンパじゃなかろうに」

同級生なればこそ、の一言だ。5年前の韓国ウォークのとき、私と同年代のメンバーが「家内の作品です」といって披露した川柳を思い出した。

歩くのに なんて交通費がいるの

年金生活所帯の主婦の実感がこもっていた。今回の10日分の宿賃、毎食と毎夜の酒代、ガソリン代だけでも、相当な額になる。私も、今回、歩き始めたころ、同じことが気になったが、日が経つにつれて念頭から消えていった。二人のことだから、いくぶんかはパートで稼ぐなどして捻出したのだろう、と生活設計のしたたかさを讃えたい気持ちもある。だが、それ以上に大切なことは、てくてく北海道一周の完結に掛ける思いが、それぞれの生活の場の中できちんと共有されていることではないか。二人の支援隊のかゆいところに手が届く支援は、そこに根ざしていることがいやというほどよく分かった。

てくてく北海道一周は、3年前には二人だけの小さな目標だっただろう。それが、二人の支援者に、それを取り巻く応援隊に広がり、いま同級生の間に感動の渦が拡大している。

この渦の中に、私は健康日本21の将来像を見つめている。日本人の平均寿命と健康寿命の間には10年間の開きがあることが、厚生労働省の調査で明らかになった。自分自身が平均寿命に近い年齢になって、経済大国日本の最大の不幸はこの深い溝にある、と実感した。そして、いま「人の世の清き国」の持つ魔法のような力の背後に、その問題解決のカギを見いだそうとしている。



編集後記

若松区のががマンションの裏に、高塔山中腹に向かう長い石段がある。石段を登りつめると金比羅宮、さらにその裏手の石段を登ると万葉の森だ。万葉の森の少し手前に、若戸大橋と四季折々の花を眼下に展望する小広場があり、18年前に住み着いたときから、この場所に心を惹かれていた。今年の紫陽花は、2年ぶりに見事な花を咲かせ、梅雨晴れの一日、ここでの酒宴にふとしたご縁で入れて頂き、最高のあじさい祭りに。願わくば 花のもとにて……と、これは銚子に乗りすぎました。(ぼんぼん仙)

とばた菖蒲まつりで「旦坐喫茶 (しゃざきっさ、さざきっさ)」という言葉を見つけた、しばらく坐ってお茶を飲もうよ、ということです。じゃあ、「旦立喫酒」は。

毎年恒例の行事として、7月は20日に若松久岐の浜花火大会、28日には戸畑祇園大山笠を予定している。楽しみにしている方も多い。6日は大分長浜神社夏祭りに、暑さを忘れて。

「まあ、ゆっくり世間話をしていきませんか。お茶でなくお酒を呑みながら」。

投稿をお待ちします。題材、文の長短を問いません。「酒」に縁のある内容であれば言うことなしです。

投稿は、はらぐち酒店に預けていただくか、kei2@bronze.ocn.ne.jpへ宜しくをお願いします。

「はらぐち閑話」は、はらぐち酒店HP (<http://homepagel.nifty.com/haraguchi/sake/>)もしくは、戸畑はらぐち酒店で検索してくださいの「かくうちの部屋」でご覧いただけます。

次回発行は9月10日(8月31日締切り)とします。(今朝の鮭)

はらぐち酒店：北九州市戸畑区中本町4番9号

電話093-871-2150

sake-tobata@nifty.com